

鯉登行一から後藤仙桂宛ての一枚のはがき

— 浦幌村の北海道開発名誉作業班 —

後藤秀彦¹⁾

Hidehiko Goto, 2022. One Postcard from Gyoichi Koito to Senken Goto.

Development work group “Hokkaido Kaihatsu Meiyō sagyo- han” in Urahoro village.

Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 22: 21-27.

1. はじめに

ここに紹介する1枚のはがきは、筆者の祖父後藤仙桂が生前使用していた『昭和二十八年四月一日改正 十勝郡浦幌村字名、地番整理調書』（北海道十勝郡浦幌村発行）の表紙裏に挟まれていたもので、30年程前、筆者が偶然発見したものである。

発見当初はそれほど気に留めることはなかったが、やがて差出人が鯉登行一であると判読できたことから、祖父と鯉登行一の関係について関心を持ち、母年子からもその経緯などを聴くなかで、太平洋戦争直後に帯広刑務所などが行った「北海道開発名誉作業班」の事業とも深く関わっていることが判明したので紹介するものである。

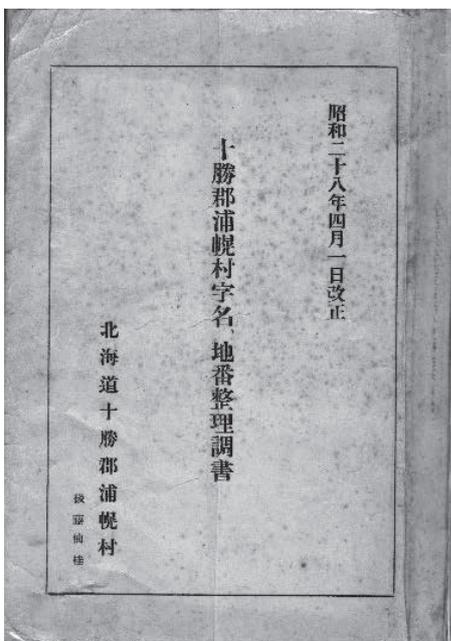
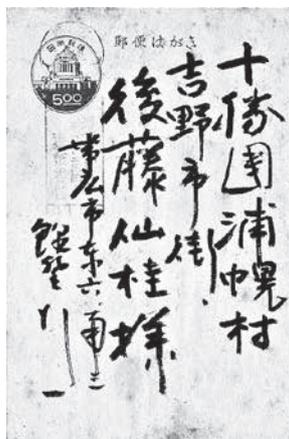
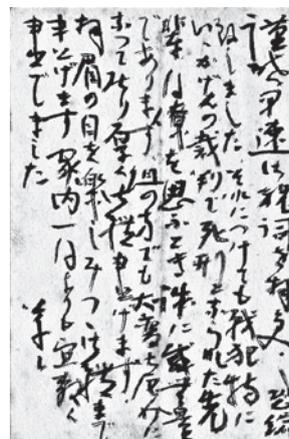


写真1 はがきを発見した調書

2. 官製はがきと文面



(表)



(裏)

はがきは、縦13.8cm、横9.1cmの官製はがきで、表面左上に、淡緑色で国会議事堂が印刷され、販売額は5円と表示されている。5円の表示は、「5.00」とある。この表示形式のはがきは、昭和26年（1951）12月1日からの発売で、同29年（1954）6月21日発売のものからは「00」がとれて、単に「5」となった。

このはがきの消印は、経年劣化のためか判読できないが、差出の上限年月日は昭和26年12月1日であることは明らかである。

また、前述したように、このはがきが、『昭和28年4月1日改正 十勝郡浦幌村字名、地番整理調書』の表紙裏に挟まれていたことを考慮すると、昭和28年4月以降の差出と考えることもできる。

文面は、次のようなものである。

(表)

十勝國浦幌村吉野市街 後藤仙桂様

1) 帯広大谷短期大学 〒080-0335 北海道河東郡音更町希望が丘3番地3

帯広市東六南三 鯉登行一

(裏)

謹啓 早速御祝詞を拝受し恐縮いたしました。それにつけても戦犯特にいゝかげんの裁判で死刑となられた先輩、同僚を思ふとき誠に感無量であります 組の方でも大変御厄介になって居り厚く御禮申し上げます。拝眉の日を楽しみつゝ御禮まで申し上げます 家内一同よりも宜敷く申出でました 早々



写真2 鯉登行一

さて、差出人の鯉登行一(こいと・ぎょういち)は、旧陸軍軍人だった人物である。簡単に経歴を記すと、明治24年(1891)3月27日、陸軍中佐鯉登行文の子として愛媛県松山市で出生。熊本陸軍地方幼年学校、中央幼年学校を経て、陸軍士官

学校に進み、同45年(1912)卒業。同年、陸軍歩兵少尉に任官し、歩兵第二連隊付となった。その後、陸軍大学校を卒業して歩兵第二連隊中隊長に昇任。大正14年(1925)からは参謀本部勤務となり、昭和7年(1932)歩兵中佐、同11年(1936)歩兵大佐に昇進し、歩兵第77連隊長に就任した。同14年には陸軍少将に進級し、同15年には第35歩兵团長として日中戦争に参戦、同16年には陸軍中將となって第七師団長に親補され、終戦まで北海道に駐屯した。



写真3 東条英機首相の帯広訪問(北海館前)。右から二人目の敬礼姿が鯉登行一(帯広市史編纂委員会編、1982)

今も、北海道の太平洋岸に遺るコンクリート製のトーチカ(防禦用陣地)はこの間に、鯉登の指揮の下、築造されたものである(多田、1974)。この太平洋岸のトーチカ構築は、当面の敵がソ連から米国に変更されたことを意味する。

第七師団は、初め旭川市にあったが、戦況の変化とともに昭和19年(1944)4月1日帯広市に移駐し、「熊部隊」と呼ばれるようになった。師団長だった鯉登も同年4月5日に帯広市に着任、東条英機首相が帯広市入りしたのは、その2日後の4月7日である。当時の第七師団の規模は、鯉登自身の談話によれば、兵力約2万人、軍馬約7千頭だった(帯広市史編纂委員会編、1984)。精鋭部隊でありながら、前線で戦闘しないという状況から、鯉登は兵士の士気低下を随分心配したという。

終戦に伴い、昭和20年(1945)12月1日陸軍省・海軍省廃止の勅令が出され、鯉登は、予備役に編入された。

その後、昭和21年(1946)3月1日付で株式会社宮坂組の倉庫係長として採用、同47年(1972)11月15日に逝去した。逝去時の身分は、宮坂建設工業株式会社常任監査役(註1)で、同年12月1日には、「鯉登行一さんの追悼会」が開催されている(宮坂建設工業株式会社編、1986)。

この経緯について嶺野侑(2014)は、「敗戦で冷たい目を注がれた鯉登將軍を経済的に支えた宮坂建設工業の創業者宮坂寿美雄さんは偉かったと思う」と、高く評価している。

3. 帯広刑務所主管「北海道開発名誉作業班」

太平洋戦争は、一般のみならず刑務所行政にも大きな影響を与えた。戦災被爆により本州の刑務所の約40%が損傷崩壊の被害を受けたことから受刑者の過剰収容が進み、悲惨な状態となった。この状態を解消するために緊急避難的に構外進出が求められるようになり、この一環として北海道開発に焦点が当てられ、法務省も「受刑者労務の国家的利用について」と題して、民間有識者や報道関係者を参集し、協議を重ねるところとなった。

一方、受け入れ側の北海道庁も過去の北海道集治監時代の悲惨な印象が拭えず、認識のズレなどもあってなかなか前に進まず、さらに北海道の失業対策事業への支障も懸念されていた。

昭和23年(1948)2月、経済安定本部の公益事業計画に受刑労務者の北海道開発事業への利用が計上され、道路建設、河川改修、土地改良など、主として土木事業で実施することになった。その特色は、①全国

的規模で厳選した優秀受刑者を派遣する、②動員施設単位に班を編成、名誉と誇りを持たせる、③処遇は、中間刑務所的な要素を持たせ、管理する、④刑期は、成績により善時制を適用、短縮、原刑務所復帰とともに仮釈放、⑤名誉作業班処遇規程により統一的に行動すること、などで作業は毎年4月から11月までとし、越冬可能な場合は、継続施工しても了とした。

この結果、北海道全体では、

昭和23年 25カ所 出役受刑者2,820人

昭和24年 28カ所 出役受刑者2,970人

昭和25年 22カ所 出役受刑者2,305人となった。

このうち、帯広刑務所主管は、次のようなものである。

年 度	出 役 場 所	事 業 の 内 容	出 役 人 員
昭和23年度	中川郡豊頃村	豊頃村道路新設工事	150名
	十勝郡浦幌村	下頃辺川人力掘鑿工事	50名
	帯広市東二条	売買川改修工事	50名
	池田町川合村	利別川・十勝川合流点新水路工事	100名
昭和24年度	中川郡豊頃村	十勝川築堤工事	100名
	中川郡豊頃村	十勝川逆水築堤工事	100名
	中川郡豊頃村	農野牛川改修工事	100名
	足寄郡西足寄村	道路新設工事	100名
	十勝郡浦幌村	下頃辺川人力掘鑿工事	100名
昭和25年度	中川郡豊頃村	十勝川改良工事	50名
	中川郡豊頃村	農野牛川掘鑿築堤	150名

このほかに、日高管内幌泉郡幌泉村の道路改良工事がある（重松、1970）。

なお、この北海道開発名誉作業班が動き出す前の昭和21年（1946）、帯広刑務所に「新吉野班が民間の請負工事で河川の切替え工事に出演、職員6名、受刑者60名」の記録がある。おそらくこれは、「北海道開発名誉作業班」事業とは別のものなのであろうが、事業自体は、昭和23年度からの下頃辺川人力掘鑿工事に繋がることになる。

さて、「北海道開発名誉作業班」の帯広刑務所側の職員配置記録が残されている。これを見ると監視に当たった職員は全国から十勝へ派遣された人材で構成され、その官職も様々である。このうち、浦幌村に派遣された「新吉野名誉作業班」の両年度ごとの派遣職員は次のような構成で、昭和23年度は府中刑務所・前橋刑務所・松本少年刑務所の3施設、同24年度は宇都宮刑務所からの派遣である。

また、十勝管内各所に職員を派遣した刑務所・拘置

昭和23年度			昭和24年度		
官 職	氏 名	派遣所属庁	官 職	氏 名	派遣所属庁
班長・副看守長	近藤数太郎	府中刑務所	班長・副看守長	寺沢 嘉平	宇都宮刑務所
看守部長	古屋 新夫	府中刑務所	看守部長	鈴木 □誠	帯広刑務所
看守部長	京 憲治	府中刑務所			
看守	奥村豊太郎	府中刑務所			
看守	沢紙 利介	府中刑務所			
看守	石川富司夫	府中刑務所			
看守	小島 鍬吉	府中刑務所			
看守	金井 芳男	前橋刑務所			
看守	能登 三男	前橋刑務所			
看守	角田郁三郎	前橋刑務所			
看守	戸塚 徳好	前橋刑務所			
看守	西川 辰吉	松本少年刑務所			
看守	佐藤 督太	松本少年刑務所			

所・少年刑務所は、豊多摩刑務所・岩国少年刑務所・門司刑務所・横浜刑務所・大阪刑務所・甲府刑務所・富山刑務所・姫路刑務所・京都拘置所・京都刑務所・神戸拘置所・宇都宮刑務所・名古屋拘置所・高松刑務所・東京拘置所・水戸少年刑務所・高知刑務所・松山刑務所・山口刑務所・広島刑務所など、全国の施設に及んでいる（帯広刑務所、1989）。

4. 宮坂建設工業(株)事務所

現地で、この事業を請負っていたのは帯広市の宮



写真4 後藤仙桂
(筆者蔵)

坂建設工業(株)である。そして、浦幌村の現地に派遣された職員の一人が鯉登行一であった。派遣期間については、詳らかではない。

宮坂建設工業(株)の浦幌村の現地事務所は、吉野市街の国道38号に面し、国鉄新吉野駅から徒歩3分ほどの場所にあり、木造平屋建て、

筆者の記憶では、5人家族の1世帯が居住していた。

実は、この事務所は筆者の生家の東隣に当り、その所在は子ども時代ではあったがよく覚えている。この位置関係が、鯉登行一と筆者の祖父仙桂とを結びつけることになったことは間違いない。加えて、仙桂が明治21年（1888）4月19日生まれで、年齢も近かったことも影響しているかもしれない。

祖父仙桂は、岐阜県武儀郡小金田村上白金出身で、名古屋市の秋葉山円通寺で僧籍に入るも還俗、妻帯後、長兄貞吉が団体長を務めていた上富良野村江幌の岐阜団体に合流後、そこを離れて、家族で浦幌村入りし、岳父下野松太郎が管理人をしていた岐阜第二殖民合資会社の岐阜農場の管理業務を補佐した。昭和4年（1929）7月4日、松太郎の死去後は、松太郎の長男甚が未だ成人に達していなかったため、実質的な後継者になった（後藤、2021）。

前述したはがき発見後、母年子にそのあたりの経緯について聞いたところ、次のような答が返ってきた。

「宮坂建設工業事務所の現場事務所に元陸軍中將だった鯉登行一さんが泊まることとなったが、それはあまりに酷いということで、我が家の座敷を提供することになった」。

つまり、祖父仙桂は、鯉登行一に宿舎として我が家の座敷を提供したというのである。この時期は、筆者の父母が結婚してまもなくのことで、そこへ鯉登行一が突然同居することになったことになる。母は、結婚前は小学校教員であったが、食事の支度などもあり、とても緊張したと述回していた。

また、父にとっても召集から復員して間もなくのことであり、自宅に第七師団長だった人物が同居するという状況になったのである。

鯉登が使用していた座敷は、床の間や押入、縁側のついた八畳の和室で、縁側は、小さな庭を挟んで国道38号に面し、欄間には岐阜農場主大野亀三郎の肖像画とゆかりの扁額が掛けられていた（註2）。そんな部屋であったので、筆者の幼少時には「子どもは入ってはいけない大切な部屋」だった。

5. はがきの内容

はがきの書き出しは、「謹啓」である。その次の文面は「早速御祝詞を拝受し恐縮致しました」で、この文面は、このはがきの主文とも言える。また、何等かの「祝詞」を贈ったことに対する返礼の内容である。これが何なのかは明らかにすることはできなかった。これを明らかにできれば、はがきを書いた時期も特定できることになる。

続けて、話題は大きく変化し、「戦犯特にいゝかげんの裁判で死刑となられた先輩同僚を思ふとき誠に感無量であります」と、極東国際軍事裁判の結果と処刑について、強いいきどおりを吐露している。ただ、不思議なのは極東国際軍事裁判所の判決が言い渡されたのが昭和23年（1948）11月12日、刑が執行されたのが同年12月23日であり、少なくとも3年経過してからの記載となる。なぜ、この時期にこうしたことが記されたのかは明らかではない。

次に触れているのは「組の方でも大変御厄介になって居り」という礼文であり、勤務先の宮坂建設工業(株)に関する謝礼があり、最後に「拝眉の日を楽しみつゝ」、「家内一同よりも」と再会を期待する文面が続き、結ばれている。

6. 『浦幌村五十年沿革史』の記載

吉野原野開拓については、『浦幌村五十年沿革史』の中にも記載がある。本書の発行年からするとリアルタイムの事業だったことになる。同書の記載は次のようなものである（浦幌村社会教育協会編、1949）。

戦後開拓事業として、豊頃原野と我が吉野原野の治水事業が相当大規模に、昭和二十二年（一九四七）以来着手され、囚人を多数引率使役して事業の促進に精進させていたが、昭和二十二年（一九四七）秋の各河川の大汎濫と戦後経済の変革によって、我が吉野干拓事業は益々必要になった。詳細に就ては別項「吉野原野開拓」を参照されたい（中略）。

吉野原野開拓

本村の南部吉野原野一名幌岡原野は、十勝川流域の東南岸で、隣村豊頃から吉野に至る約四、〇〇〇町歩に渉る葦原湿地帯を云う。この一大湿地は今や国土開発の一環の事業として国営で、昭和二十年（一九四五）から干拓に着手された。

このプロジェクトで計画された工事は、次のようなものである。

1. 排水

- ①豊頃から吉野に至り下頃辺川に合流する延長12kmの幹線排水路の掘削。
- ②幹線排水路を中心に配置される支線排水路の掘削。
- ③支線排水路からの派線排水路の掘削。

2. 道路

- ①豊頃ー吉野間の延長13,120m、幅員7mの幹線道路の敷設。
- ②幹線道路を中心とした支線道路を全域に敷設。幅員5.5m、延長9,138m規格と幅4m、延長47,580m規格のもの。

3. 築堤

十勝川左岸に豊頃ー愛牛ー浦幌太に至る築堤の構築。

4. その他

- ①客土予定 面積1,000町歩。
- ②防霧林の設定。

そして、この事業は昭和20年に着工され、同29年に完成予定をもって帯広土木現業所出張所を豊頃に、同開拓工場を吉野に設置し、吉野関係の工事は帯広土木現業所直営の機械掘りと帯広市の宮坂組などで行われ、同組では、帯広刑務所の受刑者百数十名を参加させ、順調に進捗しているという。

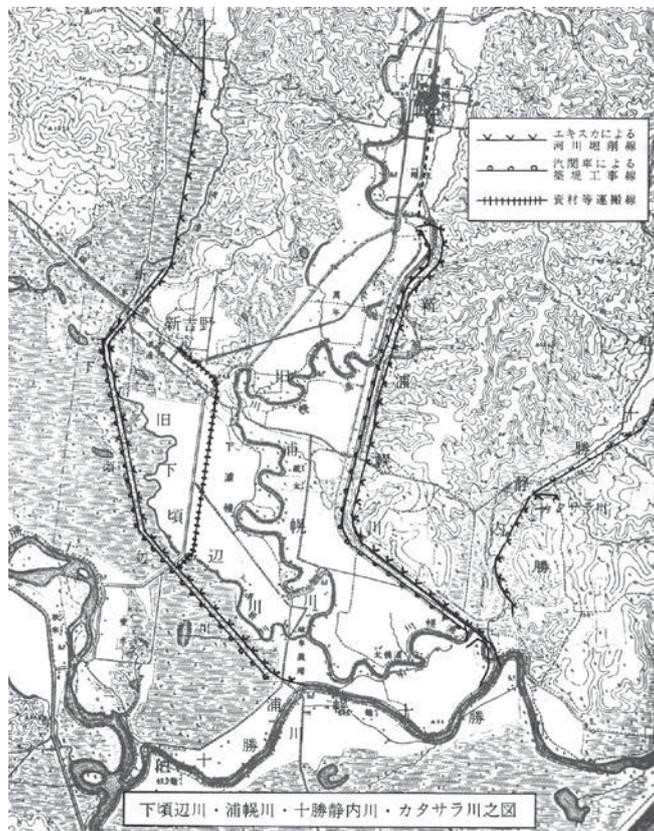


図1 下頃辺川・浦幌川・十勝静内川・カタサラ川の図（小林、1990）

一方、小林實（1990）は、十勝の軌道を検討するなかで、下頃辺川改修と軌道について触れ、次のように述べている。

戦後最初の機械掘削として登場した下頃辺川にはかつて十勝川新水路で活躍した40屯級のエキスカベーターと20屯機関車が持ち込まれた。実に無謀な行為である。然し当時としてはそれに替る対策はなく、止むを得なかったであろう。湿原に過大な重量のエキスカを土運車で軌道は沈下し、土運車（ドン車）を曳く機関車は脱線・転覆を繰り返し、一雨降れば幾日も作業は出来ず、作業計画は全く立たなく、予想以上の困難を窮めていた。昭和24年、G.H.Q.のジョンソン発言により下頃辺川改修工事は下流の愛牛附近でわずかに掘削されたのみで中止となり、同年10月に吉野事業所を閉じた。

この工事の施工は、その後も請願が続けられ、昭和28年（1953）特殊河川の認定を受け、翌年に下流側から順次施工するという計画が策定され、北海道総合開発の一環として、国費による工事となった。

工事再開に伴い、導入されたエキスカベーターは22屯級で、前回の半分程度の小型であったという。



写真5 下頃辺川の22屯エキスカベーター（小林、1990）

7. おわりに

一枚のがきをきっかけに、太平洋戦争直後に吉野原野（別名幌岡原野）で施工された排水工事や道路敷設などを行刑の視点からと地元自治体の視点から見てきた。

まず、明らかとなったのは帯広刑務所などが行った「北海道開発名誉作業班」は、現地からの要請で組織されたものではなく、すぐれて太平洋戦争で壊滅的な打撃を受けた司法行政が、刑務所施設の約40%を失ってしまったという物理的な問題からのスタートであっ

た。受刑者を収容できないという現実的な問題を早急に解消するためには、受刑者を外部に派遣させる必要があり、恰好な対象となったのが「北海道開発」だったのである。

この政策が北海道庁に持ち込まれたときに、当事者たちが明治期の北海道集治監時代を想起したということは、北海道の道路開削や港湾整備の過程でタコ部屋が作られ、多くの犠牲者が出たという歴史的事実を思い浮かべたためであろう。これは、素直な反応と言っ

てよい。一方、吉野原野の干拓工事は、昭和20年に10年計画で着手したものである。この時期を考えると、当然、太平洋戦争中に計画され、着手したものと思われる。とすると、帯広刑務所から昭和23・24年度の両年、「新吉野名誉作業班」の派遣は、宮坂建設工業㈱の要請に帯広刑務所が了解をしたものか、その逆に帯広刑務所から宮坂建設工業㈱に受入れを要請したものかであろう。

いずれにしても、既に動いていた事業のうち2カ年間のみを名誉班が関わる年度としたもののようである。

幼い頃、家の居間の南東側の窓からの景観は、遠くに日高山脈を臨み、その手前に十勝川、そしてその手前に浦幌川の支流の旧下頃辺川が流れるという位置関係に在った。そこから、蛇行の激しい旧下頃辺川を直線化するために、新川を掘削する作業をかすかながら遠望することができた。それが現在の下頃辺川である。

新川掘削には、「エキスカ」という河川掘削用の機械が導入され、その作業風景も窓からかすかに遠望することができ、周囲の大人が「エキスカ」という単語を時折、口にしていたのを覚えている。現在、下頃辺川流域は沃野となり、旧下頃辺川はわずかに水の流れるせせらぎのような川となってしまったが、太平洋戦争直後の約10年間、この地で大きな土木工事が行われ、そのうちの2年間は帯広刑務所新吉野名誉作業班の働きが確かにあったということは、覚えておかなければならない。

最後に、この小文を書くにあたり帯広百年記念館学芸員大和田努氏から種々ご教示を賜りました。ここに銘記して、感謝申し上げます。

註

- 註1 株式会社宮坂組は、昭和23年(1948)5月1日、
宮坂建設工業株式会社と社名を変更した。
- 註2 岐阜農場主大野亀三郎の肖像画と扁額は、浦幌
町立博物館に寄贈した。

引用文献

- 浦幌村社会教育協会編，1949. 浦幌村五十年沿革史.
浦幌村役場，浦幌.
- 帯広刑務所編，1989. 帯広刑務所小史. 帯広刑務所，
帯広.
- 帯広市史編纂委員会，1982. 帯広の百年：帯広市開
基百年市制施行五十年記念事業. 帯広市役所，
帯広.
- 帯広市史編纂委員会編，1984. 帯広市史. 帯広市役所，
帯広.
- 後藤秀彦，2021. 生剛村第二岐阜殖民合資会社岐阜
農場、農場主大野亀三郎、管理人下野松太郎に
関するメモ. 浦幌町立博物館紀要，21：17-31.
- 小林實，1990. 十勝の軌道その四：中小河川の工事
に活躍した軌道. トカッチ，4：76-93.
- 重松一義，1970. 北海道行刑史. 図譜出版，東京.
- 多田勝秋，1974. 道東の防衛. 私家版.
- 嶺野侑，2014. 鯉登師団長. 十勝毎日新聞2014年1
月23日.
- 宮坂建設工業株式会社編，1986. 50周年：大地にの
こせ100年への足跡. 宮坂建設工業株式会社，帯
広.